

「2023年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学経済学部2年 石黒 剛

今回の派遣プログラムは、私にとって初めての留学経験であり、初めての渡航経験であった。右も左もわからぬ私が唯一理解していたのは、ただ漫然と過ごして進歩を得るにはこの三週間という時間は短すぎるということだった。そこで私は学習目標を立てた。一つはなるべく長時間中国語に触れること、そしてもう一つは街頭に出て現地の方々と交流することで、香港の社会について日本と比較しながら理解を深めることだ。

中国語に自らを没入させる、という目標は一定の成功をみた。英語での説明が主となっている所定のクラスから中国語で開かれているクラスに移動し、否応なく中国語を聞き取り、使用せねばならない環境に身を置いた。課外においても、クラスメイトと戯れに中国語を話すようにして、中国語を話す心理的な敷居を一定低くすることができた。実際の街頭でも、失敗を繰り返しながらも意思の疎通が少しずつクリアになっていったのを実感した。

香港の社会観察というもう一つの学習に関しては、毎日が当初の想像を超えた鮮烈な驚きの連続であった。たとえば政治的な分野に関して言えば、香港に対する私の以前の印象は、一国二制度に基づく歴史的特異性と自由を奪われ、大陸に同化されつつある斜陽の金融センターといったものであった。しかし、街頭に出て実際に現地の人々と交流する中で、そういった印象とは異なる実態も見えてきた。私は現地の人々、学生と交流する際に、彼らは不自由がために口をつぐむだろうからと政治、社会に関する意見を聞くことを避けたが、むしろ彼らは積極的に意見を表明してくれた。彼らの意見は中立的、客観的で、冷静なものであった。彼らの意見の中に唯一垣間見えた熱いものは、香港人としてのアイデンティティであった。そのアイデンティティには、当然歴史的な特異性と、その中で培った自由も大きな要素としてあるのだろう。これらに基づく香港人のアイデンティティは、いくら強大な政府でも、剥奪することは容易ではない。香港はこれからも、大なり小なり変化こそあれ、(その変化が香港人の希望するところであることを望む) その特別な地位と魅力ある歴史を維持していこうと強く思った。

今回の派遣プログラムは、本当に実りあるものとなった。海外留学に対する漠然とした憧れは、今回のプログラムで具体的な輪郭を持って想像できるようになった。今回はさまざまな方々に頼るかたちで送り出していただいたが、次回はより積極的に、自分を成長させる機会を探していきたいと思う。